

演題名：「歯周病治療の長期予後」

吉成伸夫

抄録

超高齢社会のわが国において、歯科医療は従来の治療から予防と管理、さらに口腔健康から全身健康へ変化し、患者の歯・歯周組織を対象とした健常者型治療から、治療のリスク・難易度の増加した高齢者型治療へと変化することが求められています。このような流れの中でも、あらゆる歯科治療において、その経過が良好に維持される長期予後を目指すことは非常に大切です。そのためには、病因のピックアップにはじまり、病態の診断、治療、予後観察など、多くの知識と技術を集積した上での対応が必要です。

歯周ポケットに対する歯周病治療は、「付着」を求める治療と換言できるかもしれません。従来のスケーリング・ルートプレーニングやフラップ手術等の組織付着療法により長い上皮性付着が獲得されてきましたが、歯周組織再生、すなわち結合組織性付着である新付着を求めて種々の歯周組織再生療法が開発されました。中でも世界初の歯周組織再生剤として、2016年に承認された塩基性線維芽細胞増殖因子（FGF-2, bFGF）製剤「リグロス®歯科用液キット」は、新たな歯周組織再生療法として臨床で普及しています。ただ、これにより抜歯がどれくらい回避できたのかデータはありません。

また、歯の保存を目的とした再生療法と、抜歯を前提としたインプラント治療においては、歯周病罹患歯に対する治療の考え方を整理しておく必要があります。さらに、術後に問題が生じた症例に関しても、歯周病の観点から基礎・臨床の研究が積み重ねられることでかなり整理され、より洗練されたプロトコールも確立されてきています。現在では天然歯保存の重要性が強調され、またその審美性がより強く求められる時代となり、疾病に対する処置のみならず術後の外見も同様に、あるいはそれ以上に重視されることから、さらに慎重に治療計画を立案すること必要性が生じてきました。

そこで今回は、今までの私のつたない症例を振り返りながら、先生方とディスカッションできればと思います。

略歴：

1990年 愛知学院大学大学院歯学研究科修了， 歯科保存学第三講座助手

1995年 愛知学院大学歯学部講師（歯科保存学第三講座， 歯周病科）

2001年 ノースカロライナ大学チャペルヒル校 口腔と全身疾患センター留学

2006年 松本歯科大学歯科保存学第1講座教授

2014年 松本歯科大学歯科保存学講座(歯周) 教授（講座統合に伴い名称変更）